



しゃべり
それだけではない。

加	藤	周	一	幽	霊	と	語	る
---	---	---	---	---	---	---	---	---

出演…加藤周一

製作…加藤周一映画製作実行委員会 矢島翠/桜井均

監督…鎌倉英也

撮影…中野英世 照明…芝丕東 編集…鈴木良子 音響効果…斎藤 實

プロデューサー…桜井均/石紀美子/河邑厚徳

協力…スタジオジブリ/ウォルト・ディズニー・ジャパン

www.ghibli.jp

© hitoshi sakurai

戦後の日本を代表する知識人として発言を続けた加藤周一が 最後に残したメッセージを、彼自身の歩みとともに構成したドキュメンタリー。

文学を始めとする芸術全般、文明、社会、政治と、幅広い視点から日本について語り続けてきた加藤周一。2008年12月にこの世を去った彼が最後に試みたのは“決して意見が変わることのない”幽霊たちとの対話だった。戦時中に、自らの運命との共通性を感じた源実朝、自由な言論が失われた中でも意見を曲げることのなかった神田盾夫、渡辺一夫といった恩師たち、そして、学徒出陣で戦地に向かい若い命を落とした友人。彼らに語りかける加藤の言葉の中から、日本の今と未来が浮かび上がる。若い世代への期待を語った講演と生前最後のインタビュー(2008年8月)も収録。

加藤周一の言葉に示唆を与えられてきたすべての人だけでなく、加藤周一という人物をこれから知ろうとする人にとっても、最良の出発点となる貴重な映像作品。



加藤周一 プロフィール

1919 - 2008年。評論家・作家。東京帝国大学医学部卒業。1951年渡仏、55年帰国。『日本文化の雑種性』などの文明批評、文学・文化・社会に関わる長年の旺盛な文筆活動で広く知られる。近年は「九条の会」呼びかけ人として、平和憲法を守る運動にも積極的に参加した。主な著書は『加藤周一 著作集』(全24巻平凡社)『羊の歌』(正統 岩波書店)『日本文学史序説』(上下 筑摩書房)『夕陽妄語』(朝日新聞社)『日本文化における時間と空間』(岩波書店)『日本その心と私たち』(徳間書店)など。岩波書店より『加藤周一 自選集』を刊行中。

「かっこいいとはこういうことさ!」などと……。

高畑 勲 (アニメーション映画監督)

加藤周一氏が亡くなって一年有余、氏を惜しむ声は絶えるどころか、氏からあらためて学ぼうとする人はますます増えている。書物だけではなく、NHKでも追悼番組やインタビュー番組が流れ、九条の会などでの講演記録もDVD化されている。その一部は、この映画にも含まれている。

けれども、この映画はそれらの映像とはまるで違う。これは、禁欲的な数少ない映像とたっぷりした思弁的時間によって、加藤周一が、なぜ加藤周一になりえたのかを、そして加藤周一がついに何者だったのかを、加藤氏みずからの言葉で浮かび上がらせようという、いや、観客に考えさせようとする、きわめて野心的な作品だ。私はあたかも一冊の書物を熟読するかのよう、貧弱な頭の中をいっぱいにして、これを「熟視聴」しないわけにはいかなかった。

加藤氏の主著は、『日本文学史序説』など数冊の日本文化論である。氏は、世界の人々に(ということは私たち現代日本人にも)理解できる言葉で、「今=ここ」に生きる日本人と日本文化の本質、その具体的な特性を見事に解き明かした。

いったい、あれほど論理的で緻密な思考を自分のものとし、西洋的なものが肌に合っているように見え加藤氏が、どうして飽きもせず、あれほど日本の文化のなかに深く分け入ることができたのか。なぜ日本文化批判一辺倒や冷たい分析だけになってしまわないで、皮肉を交えつつも、同時にそれを愛することができたのか。『羊の歌』を読んだからといって、必ずしも十分に納得できなかったその根本のところ、この映画のおかげで、私にも少しはわかったような気がした。戦中、未来のない、いつ死が訪れるかもしれない学生時代に、これまた失ってしまうかもしれないものとして味わった文楽や夢幻について、そして自分たちと重ね合わせずにはいらなかった悲劇の人、源実朝について語った後、氏は言う。

「若いときに一番心を揺さぶられたものは、そういう、失われた文化に対する強いノスタルジーみたいなもの、郷愁みたいなものが、なんていうかな、自分の中に入ってくるというか、心情の形成に強い役割を演じて、そして今に至るまで、ついにだから一生の間、それから完全には離れませんね。」

しかもこれが、戦争で失った友への思いから発する絶対的な反戦主義と根づきで結びつき、滞欧経験がそれを鍛え上げて、加藤氏の終生のテーマ、反戦(および自由)と日本文化の相対化という二つの大きな柱を形成することになる。

この映画では、生と死など、さまざまな対比が話題となるが、そこに彼岸と此岸の対比はなく、あるのは生きている者(加藤氏)と幽霊(対話さえできる死者)の対比だ。加藤氏に「幽霊と語」らせようとしたのはおそらく映画制作者のたくらみだが、この対比は、夢幻能のように優れて「今=ここ」的であり、それにやすやすと乗る加藤周一氏は、あれほど一見西洋的でありながら、同時に日本人の一人であることの自覚がはっきりあったのだと思う。

この映画を見て、加藤周一氏の人生のあまりの一貫性・整合性に感嘆し、思わず「かっこいいとはこういうことさ!」などと言ってみたくなるのだった。

レベレ
それだけではない。

加藤周一 幽霊と語る